



TITLE:

長崎縣中等學校[[所]]見一斑

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

---

CITATION:

小川, [琢]治. 長崎縣中等學校[[所]]見一斑. 地球 1924, 2(2): 333-337

ISSUE DATE:

1924-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182728>

RIGHT:

## 長崎縣中等學校所見一斑

小 川 琢 治

昨秋長崎縣當局者から縣下中等學校の地理科教授の視察を依頼されたが、關東震災の際で客冬直ちに其の希望を充すことが出来ないので本年六月下旬から七月上旬の間二週間に同縣の中で交通機關の便利な部分だけ一通り巡回することにした。巡回した箇處は佐世保、大村、諫早、島原、長崎の五ヶ處で平戸、壹岐、對馬、五嶋へは行く時日がなかつたのを遺憾とする。

佐世保では中學校と女學校の兩校だけを視て女學校で三十分許講話を試みた。突然の依頼であつたが、軍港たる佐世保と貿易港たる長崎との地理上の意義を簡單に説明し、平安朝の綱紀の弛んだ頃に起つた西國の海賊は關東の武士と對比すべきもので、今の海軍と殆んど同じ意義の海賊が此の地方に起り、又た海外交通が早く

開けて、三百餘年前に平戸、長崎に西洋船舶の出入を見るに至つた事實の地理的意義を述べた佐世保高等女學校の位置は停車場の上の山手に在つて、軍港を瞰下ろした眺望の好い處を占め梅雨をば降る折からで灣上の煙雨も一種の趣を添へ米家の水墨山水畫の様に見えた。

第二は大村の中學校高等女學校と縣立師範學校を見た。師範學校は新らに長崎市から此處へ移轉した新築の校舎で、多良岳火山の裾野が大村灣に入る處にあつて丘陵の上に校舎、下に寄宿舎運動場等が設けられてゐる。地所に乏しい長崎市から此の高燥にして水陸運動の便ある閑靜なる場處に移つたことは縣の方針として頗る適當な處置であつたと想はれる。此の校舎の位置が展望に富み、殊に地理の教授には山嶽高

原半島島嶼港灣等のあらゆる地物を樓上から指示し得るのであるから、凹凸模型などを使用せずに、實物示教の効果を收め得べく、此の點は特に羨ましかつた。

此の師範學校に就て特筆すべきは明治初年の第五大學區長崎師範學校の後身であつて、當時の備品が種々保存されて、和漢の書籍は二回の祝融氏の禍を免れたもの多く、一八七四年製の地球儀の如き製作の精巧此の頃の輸入品に比して霄壤の差あるなども面白い。此の學校新設に當り先考が英語學校長水野遵氏と共に暫く赴任した筈であるが、當時の沿革は今分らなんだ。

長崎には近頃漸く醫科大學の昇格を見たが、若し明治初年の佛國制度に倣つた大學制が続いてゐたらば、法文理醫位の綜合大學が三四十年前に出來てゐたらうと思はれる。長崎人はシールドを擔いで騒ぐよりもつと大きな文化運動を起して、宜しく西洋文化搖籃の地に一大綜合大學を興す様に奮發すべきでないか。

此處では地震に就いて講話を試み、大村侯の

城址大村神社などを一覽して夕歡迎會に臨み、元大村中學校校長澁江文學士も來會せられたので歡談刻の移るを知らなんだ。

なほ大村に陸軍聯隊がある外に此頃は海軍飛行場が設けられて、海賊の頭目大村一族の地下の眠りは日々空中の發動機の音響に驚かされつゝある。

諫早では中學校女學校農林學校を視た。女學校は諫早侯の舊城内に在つて、書院は今も閑靜幽雅の林泉と共に保存されてゐる。かねて記憶する諫早文庫のことを聞いたが、記録類は長崎圖書館に納めたとのことで、溫泉嶽の噴火に關する記録のあるべきを知つた。

二十六日夕島原に着き、寛政噴火の時に前山（眉山）から迄落ちた熔岩々層の丘阜海に入る處に新築された南風樓に宿し、翌朝松林を散歩し前山熔岩（白色安山岩）に奇麗な角閃石を含む標本を採集し、島原中學校と女學校を見、午後女學校で講話を試み火山地震と深發地震との關係を島原寛政地變と一昨冬の地震を實例として説

明した。

二十七八兩日は長崎の諸學校中縣立中學校、女學校、女子師範學校、縣立商業學校だけを見二十九日は茂木に中等教員の遠足を試みた。連日降りみ降らずみの梅雨日和であつたが、幸に此の日は晴天であつた。茂木小學校長の案内で故大日向理學士の長崎圖幅説明書に記載した野口某氏宅裏と白石の海岸の兩露頭を見た。

第一の露頭は十數尺の崖で地表から四五尺の處に薄い含化石帶を夾み、上部は白毛の浮石質砂層と暗色の泥岩の互層であるが、其下に結晶片岩の礫を含む暗色の礫層がレンズ狀を成して夾まり、一端は急に尖滅してゐる。

第二の白石海岸では玄武岩の熔岩流が下盤を占め、其上に結晶片岩礫層を夾む所の茂木層が北に五度乃至十度の傾斜を成して堆積し、海岸に沿ひ北に追跡すれば小さな斷層及び褶曲があつて、其の先きは分らぬ。含化石層は漲潮面の邊の崖から礫に連り、漲潮には暗礁となる。幸に此の日は一時頃干潮であつたから、崖の露頭

から追跡して礁上の殆んど平坦になつた含化石層を搜し當て、多數の遠足者が同時に槌を揮ふことを得た。

然れども此の岩石は海水に漬されて柔靱で意の如く平板に割れぬので、現場で完全な葉片を得ることが困難で、ナトルスト氏の論文を現場に携へて採集したに拘らず、十分な採集が出来なんだのれ残念であつた。殊に針葉樹は全く出ず *Phyllites* の類の草本も僅に一枚の葉を認めたに止つた。採集中に遠足者一人が重な含化石帶より一二尺を隔てた上盤から稍太い炭化した幹を含む一帯を發見したのは注意すべき點で、未だ更に採集に注意したらば面白い發見が出来ることを知つた。

茂木港南の茶店で晝餐を取つた。此處からは島原半島の南が見え、溫泉岳安山岩の裾野と上原玄武岩高原との地貌の相異がよく認められた。三十日は西彼杵三重に遠足の豫定であつたが、雨天で見合せ、女子師範學校に於て午前中長崎縣の地質圖其他を展觀して卓上で一通り説明し

午後は高等商業學校で刀劔の地理的考察といふ題で講演した。

日本刀のことは以前から興味を感じ、長崎で早朝散歩の時に偶然京物左文字物備前物等を獲たので、之を陳列して支那銅劍、チャワのクリス刀、日本刀の反り等の東西交通上の意義や、刀劔工の分布の經濟的關係等に就いて簡単に述べた。此の問題は本誌上で詳細に論究する考であつたが、試に想ひ着いたゞげを述べて見たのである。

七月一日午前九時から地理教員協議會を女子師範學校樓上で開いた。提出案は二十項で種々の方面に涉つたが、殊に重要なのは地理科擔任教員の地理研究會を組織して、教授材料を交換し、又た毎年一回中等學校所在市町で總會を開かんとする計畫であつた。長崎支部が主として報告の編纂配布等の事務を擔當することになつて、高等商業學校教授中野文學士を顧問として直に支部を組織し、行々は縣の補助を得て、縣下教員の縣内の地理を諳んずる途を開くことに

なつた。

午後地文及び人文地理學上より見たる九州西北部といふ題で講演し、縣下の地文及び人文地理に互つた郷土地誌の總論と地方誌の研究方法等に就いて述べた。是も其内本誌に載せる筈である。

旬日の視察中に注意した點は多岐に涉つてゐるが、長崎縣下の中等學校には郡立を縣立として日なほ淺いので設備不十分を免れぬものがあることか其一で、最も必要と想はるゝ地圖類の缺陷が其の二であつた。標本類に至つては博物科理科と關聯して之を補充する必要あること其の三であるのも勿論である。然れども此等の設備中第二第三は必しも多額の經費をかけずとも若し縣下地方の學校間の採集品の交換や陸地測量部地形圖の選擇等から着手すれば或る程度までは之を補充し得る筈である。故に地理研究會の如き機關が有効に働けば多少之を改善する途は開けて行くことゝ想はれた。

今回視察中最も興味を感じた一はダルトン式

の教授法を地理科に試みた學校があつて、生徒三四人を一組として札を集めて與へられた問題を教科書、附圖、及び參考書により各箇に研究しつゝあつたことである。此の方法は地理科に於ても、適當な參考書がある場合には相當好果を收め得る筈である。然れども此の試みに於て注意すべきは複雑な人文上の現象を餘りに簡單な兒童に解され得る原因で獨斷的に解釋する弊害が伴ふことである。地理的現象に就いて原因の一が擧げられたゞけで速斷することが出來ぬ場合が多いのであるから、兒童の解し得る様な範圍を限つて「何故」といふ問題を與ふべきで、多くは「何處」「如何に」といふまでに止めねば却つて事物を深く立入つて考へないことになる。外國地理などの如く邦文の適當な參考書なき部分では特に困難であるから、此の種の試みには十分利害得失を考慮せねばならぬと信ずる。我々の此の教授法を見て直に感じたのは地理科の場合にダルトン式方法を採用するとせば其の第一の必要は書物でなくて自然其もの即ち野外で

觀察した事實を書物と比較して理會させることに在るべきで、又た此の方法を試用すると否とに關らず、比例尺の大きな地形圖と現場の土地との關係から出發して、地圖に示された所を具象的に頭に入れる様に導くことが地理教授の根本義とせねばならぬことであつた。

終に臨んで何れの學校の教授にも地文と人文とを結び付けて行く遣り方が共通で、教員の個性によつて努力の方面は多少づゝ異つても目標が大體當を得てゐたのは今回視察中に最も意を強うし愉快に堪へなんだ事を擧げて擱筆する。

(七月九日)